

トピックス

1. 播州日誌「福先生と呼ばれて」

2. 南国土佐を後にして 第9回



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 64

2023年 4月号

清明～穀雨 の候 春をつかまえて

さあ待望の春が来た
すべてが清々しく
明るく 輝く季節

鳥たちの朝は早い
小さき命程 朝を喜ぶ
魚は群れ遊び 競って飛び跳ねる

緑は日一日と濃くなり
桜前線は北上を続ける

弘前城の 百年桜
一度は見てみたい お堀の花筏

花々は咲き乱れ
蜜蜂は嬉しそうに蜜を吸う
さあコートを脱いで
春をつかまえよう

若き日の思い出を語ろう
桜の花の 美しさ あやしき
散り際の 潔さに
心 打たれる

人生の最後
心半ばにして 物故された
人々を想う

静と動

いや 思うのを やめて
体ごと陽気に つつまれよう
コロナ禍を経て
人びとは やさしくなった
3年前の 日常を 取り戻しつつ

まあ とにもかく
春を喜び 桜を愛でて
一呼吸
さあ マスクを外して
春の空気を 胸いっぱい
春をつかまえよう

これまでも 生きてきた
これからも 生きる
生きねばならない
散り際の良さを
見せるためにも

幾度の春を経て
今年の春は これっきり
だからこそ
大きな春も 小さな春も
春をつかまえよう しっかりと





播州日誌

福（フク）先生と呼ばれて

外国人技能実習生を、管理団体（組合）の管理責任者として、受け入れの事業を開始して半年が経過した。初めての実習生が10月に入国し、11月から配属先の企業（実習実施者）で働き始めて5か月になる。色々な問題も走りながら考えざるを得ない今の状態。1か月に一度企業訪問をして、契約通りの労働をし、賃金を受領していることを確認、労務管理上の問題の有無について監査する。ようやく5人の名前と顔が一致するようになった。



ベトナム人の名前は難しい。リー、ニェウ、タム、レン、ユエン。今のところ問題なく就労し、国への送金もしている。明るく、楽しく、元気よく、3年間を無病息災に過ごし、日本で働くことができ良かったと言ってもらえることを、究極の目的として対応している。

たくさんの監理団体の中には、色々な責任者もいて、いまだに技能実習生を「安い労働力」としか見ていない。私は事業主には、始めから「安い労働力」ではなく、

むしろ日本人を雇うより「高い労働力」であることを、徹底して理解してもらっている。社会的には一部の建設業、農業、漁業の就労環境について、悪い面ばかりの報道がされている。「技能実習制度は奴隷制度」「劣悪な職場環境、それは正に地獄」などの報道が横行している。マスコミはもっとまじめに普通に、制度運営をしているところに目を向けなければならない。私の周りにそういった劣悪な職場環境を知らないし、奴隷扱いというのは、いささか煽情的な報道ではないかと思う。

今でもベトナム人の、日本志向は熱いものがあり、他国よりも日本を選ぶ場合が多い。

私たち日本人、そして日本国として、その期待に応えうる対応をしなければならない。入国後研修の費用や生活援助、日本語教育、法定福利、各種検定試験の費用負担等々多くの支援の手が差し伸ばされている。実質賃金は4月現在においても、時給1500円を下らないと考えている。日本のマスコミも、もっとまじめに取り組んでいる監理団体や企業に注目しなければならない。無責任な報道は国益に反し、経済的平等を阻害することになり、国の将来を危うくする。現実的にベトナム人の首に縄をかけて連れて来ているのではない。彼彼女たちが、募集を見て応募してきているのは誤りのない事実だ。最低月1回の面談では私のことを福（ふく）先生と呼んでくれる。私もできるだけ名前と呼ぶようにしている。毎月の面談が楽しみだ。彼女たちが健康で元気に働いてくれることに感謝している。

2023. 3. 25



～南国土佐を後にして～

第9回 「高知編」

「コニカはコニカ いいと思うよ」

昭和40年 1965年 高校2年生 17歳。この年、人類初の宇宙遊泳。高度経済成長の歪（公害問題）の表面化。40年の不況と言われながら、社会的には「昭和元禄時代」ムードであり、GDPは世界第2位に達した。陰と陽が混沌として現出した感があり、40年不況克服の後イザナギ景気といわれる57か月に及び高度経済成長の後半期に入る。日韓基本条約締結、大阪万博正式決定。朝永振一郎ノーベル賞受賞、野村克也戦後初三冠王。

生活はまあまあであっても、みんな忙しく、活気に満ちていたこの年。私も青春を謳歌していた。その頃「コニカはコニカ いいと思うよ」と言うカメラのCMが流行った。確か大橋巨泉のセリフだったと思う。クラスの中でコニカと渾名された子がいた。YTさん。たくさんの人と付き合えるようなタイプではなく、いつも一人でいるようで、話かけられると誰にでもニコニコと対応していた。ある時友人が「あの子、いつもニコニコしてコニカみたいだな」というのを聞いて、私の中でもコニカというあだ名が付いた。出しゃばることがなく、ただ神経質そうで人に、気を使いすぎるところがあった。一言で言えば「難しい女の子」であった。席が近くなったりして、何だかんだ少し話をするようになった。2年生の何時頃だったろう。お互いに意識するようになり、好ましく思う気持ちが日増しに強くなっていった。彼女の女らしい柔らかな仕草がたまらなく好きだった。妹のような感覚であったが実際は少し姉さんになる。社会的には高校生の男女交際は不良のイメージがあって、正々堂々というわけでもなかった。喫茶店の出入りが禁止されていたので、デートスポットは学校のすぐ近くにあった高知城。お城としては小さいけれど、日本では山城の原型をとどめる名城として有名であった。歩くとそれなりの広さがあり、男女交際が窮屈であった当時は絶好のスポットだった。少し遠出ができるときは桂浜、五台山、筆山などに出かけた。月の数回は放課後示し合わせてデートを重ねた。将来の夢や家族のこと、たわいのない話を飽きずにした。立ったままで1時間～2時間。私のことを、寂しかった毎日を明るい日々に変えてくれた人と言ってくれた。

彼女は高知市近郊の岡豊（おこう）に住んでいた。長宗我部元親が岡豊城を築き、四国統一の拠点としたことで有名。土佐電鉄（路面電車）で岡豊口まで行き、後は徒歩1キロ。

日暮れの早い秋から冬は、それを考えてはりまや橋で電車に乗せなければならない。別れは涙が出るくらい、辛く悲しかった。二人の思いは一つだった。

愛という言葉にとまどいながらも、心のどこかでそれを引き止めようとするものがあり、一進一退。しかし恋愛などそんなものだと思っていたし、それ以上の欲求があったわけでもなかった。好きな人との時間を大切に、それだけで時間は過ぎていった。

一度だけ事件があった。少し足を延ばして手結（てい）の浜に行ったとき、地元の不良たちに取り囲まれ、卑猥な言葉を浴びせられ、彼女が拉致されかけた時だった。必死に抵抗する私を恐れて結局は捨て台詞を残して離れていった。木刀のようなもので4～5回は殴られた。その時は不思議と痛みを感じなかった。泣きじゃくる彼女を抱きしめて「もう大丈夫怖くないから」「ごめんな、こんな目に合わせて」と謝った。帰りの電車の中、彼女は終始無言だった。降りる駅が近くなって彼女は言った。「ありがとう」「今日のこと一生忘れません」「私・・・私・・・あなたが大好きです・・・」そう言って逃げるようにして降車した。暮れなずむ停留場に、立ち



つくす彼女が愛しく、涙をこらえきれなかった。

その日を境に、より求めあうようになった二人は、映画やイベントに遊びに行った。いつの間にか、お互いに手を繋ぎあうのが普通になった。数学が弱かった私に彼女はよく教えてくれた。まじめにしない私はよく彼女からにらまれた。幸せな時間がそこにはあった。高校 2 年生から 3 年生。クラスが別々になったが、学年中でも二人のことは、オープンになっていたのも、よく皆に冷やかされた。それがまた嬉しいことでもあった。



創作 ショートストーリー

月と兎（うさぎ）

3 か月前に生まれた子ウサギは、体の毛が真っ白だったので、生きもの係の子供たちによって「白（シロ）」と名付けられた。子供たちは毎朝毎朝交替でたんぽぽの葉を積んできては兎たちの世話をしていました。仲間の子ウサギは 10 匹あまり、そう広くないウサギ小屋で体を寄せ合って暮らしていました。ウサギは生まれつき泣くことを知りません。せいぜいクウクウと反芻する音を出すくらい。だからどんなに悲しくても泣くことができないのです。シロは、まん丸いお月様を小屋から見るのが大好きでした。まん丸いお月様といつも話をしていました。そうして眠くなると母ウサギの胸に抱かれて丸くなって寝るのが好きでした。



子ウサギが大きくなるにつれ、ある問題が出てきました。実はシロの目が生まれつき茶色でみんなと同じ赤い目ではなかったのです。やがて「いじめ」が始まり、それは日に日にひどくなっていきました。シロはだんだん元気がなくなり、小屋の隅で小さくなっていることが多くなりました。シロは泣くこともできずいつものようにクウクウと音を立てていました。ようやく満月の日が来て大好きなまん丸いお月様に会えました。「お月さま、お月さま。どうして私の目は、赤くないのですか。どうしてですか」と訴えました。赤い目でないことで、いじめられるシロを哀れに思ったお月様は「29 日目に会うまでに毎日南天の実を食べなさい。そうすれば目が赤色に変わるだろう」と言いました。シロは 28 日の間、お月様が差し入れてくれた、赤い南天の実を食べ続けました。やっと 29 日目になりました。「シロ、頑張ったね。お前の目はもうみんなと同じきれいな赤だよ」とおっしゃいました。仲間みんなも驚きましたが、その後は「いじめ」がなくなりました。シロは嬉しくてうれしくて、元の元気な子ウサギになりました。

幸せな時間は短く、あっという間に過ぎ去って行きます。

数か月後の夜、元気に飛び跳ねていたシロが、何者かによってかみ殺されてしまいました。体は鋭い爪で引きちぎられ、それはもう、先生方が生徒たちを遠ざけて始末しなければならぬほど。不条理で残酷なシロの死。母ウサギはなすすべもなく、泣くこともできずただ見送る他ありませんでした。クウクウと音を出すばかり、ただただシロを想う毎日。食事せず、水も飲まず、どんどん体が細くなっていきました。満月の夜、まん丸いお月さまに訴えました。「どうかどうかもう一度、シロに会わせて下さい。」「叶うならば、命など要りません、会わせて下さい、私のシロに・・・」母ウサギの心に動かされたお月様が言いました。「会わせてあげよう、特別に、今度の満月の日に。」

満月の夜、お月様に導かれて母ウサギは、月世界に召されました。そこにはシロが待っていました。嬉しくてうれしくて、母ウサギとシロは飛び跳ねて睦（むつみ）あい至福の時を過ごしました。

満月の夜。お月様の中で仲良く餅を搗く「ペタンコ」「ペタンコ」という音が聞こえてきます。耳を澄ませば、ほら・・・。

2023. 3. 27